

# メキシコ史研究と『クロニカ・メヒカーナ』

井 上 幸 孝

## はじめに

『クロニカ・メヒカーナ *Crónica mexicana*』は、メシーカ王家の子孫であるエルナンド・デ・アルバラード・テソソモク Hernando de Alvarado Tezozómoc が 1598 年頃に編んだとされる歴史書である。原本は見つかっておらず、複数の写本が現存する。全 112 章から成りり、アステカ王国の歴史がスペイン語で詳述されている大部な史料で、アステカ史研究のための最重要な情報源の一つと見なされている。

本稿は、メキシコ史研究において『クロニカ・メヒカーナ』が果たす役割について論じることを目的とする。1.では、本史料の複数の写本をウェブ上で公開すべく筆者が数年前から取り組んできたプロジェクトの概要を述べる。その上で、2.ではこの史料についての研究の進展がメキシコ史研究に果たす役割について展望を示す。さらに 3.では、植民地時代の先住民クロニカ研究の中での『クロニカ・メヒカーナ』の位置づけについて論じることとしたい。

## 1. プロジェクト・クロニカ・メヒカーナ

プロジェクト・クロニカ・メヒカーナ Proyecto Crónica Mexicana(以下、PCM)は、ウェブ上で公開するためのプラットフォームを作成し、『クロニカ・メヒカーナ』の複数の写本を掲載して全世界に発信するという取り組みである。クレメンティーナ・バトコック Dra. Clementina Battcock (国立人類学歴史学

研究所歴史研究部)、ベレニセ・ブラーボ・ルビオ Dra. Berenise Bravo Rubio (国立人類学歴史学学校)、そして井上幸孝 (専修大学文学部 [当時]) がコーディネーターを務め、2019 年に一般公開を開始した<sup>2)</sup>。

本プロジェクトが始動するきっかけとなったのは、2016 年 10 月 29 日～30 日に東京で開催されたメソアメリカ研究者の国際会議 (Primer Congreso Internacional de Mesoamericanistas) であった。筆者は、メキシコから招聘されたバトコックとともに報告者としてこの会議に参加した<sup>3)</sup>。その際、二人は、当時進行中だった文部科学省科学研究費補助金・新学術研究 (研究領域提案型)「古代アメリカの比較文明論」(代表: 青山和夫、茨城大学教授)の枠内で『クロニカ・メヒカーナ』の写本公開に向けたプラットフォームの作成を提案した。この提案は実現に移されることとなり、筆者が分担者となっていた国際活動支援班の研究活動の一環として実施する予算的な裏づけが得られた。こうして、『クロニカ・メヒカーナ』の写本の電子化の作業を 2017 年度と 2018 年度の 2 年間に亘って進めることが可能となった。

2017～2019 年度にかけて筆者は年に二～三回のペースで渡墨し、その度に本プロジェクトのコーディネーター三名を中心とした会合を重ねた。これらの会合では PCM の実施の手順を決め、進捗状況の報告を逐次行いながら課題を一つずつ解決していった。

原史料の画像 (写本の各葉の写真) とその転記テキスト (文字化した本文) を掲載することを基本的な目的とすることから、古文書読解 (パレオグラフィ) の専門家の参加が不可欠であった。そのため、プロジェクトの始動と同時にブラーボ・ルビオに打診し、コーディネーターとしての参加の快諾を得た。そして、写本の参照が可能となったものから順に、彼女を中心としてメキシコで転記作業が進められた。

転記作業を始めるに際し、まずは PCM の対象とする写本を選定する必要がある。検討の結果、メキシコの国立総合文書館 (Archivo General de la Nación, 以下 AGN) 所蔵の写本、同じくメキシコの国立人類学歴史学図書館 (Biblioteca Nacional de Antropología e Historia, 以下 BNAH) の写本、さらにはテキサス大学 (University of Texas at Austin) 所蔵の写本の公開を目標とすることになった。AGN 写本についてはルイス・アブレウ館長 Dr. Carlos Enrique

Ruiz Abreu と面談するなどの交渉を行い、画像の提供と掲載許可を得た。BNAH 写本については、バトコックとブラーボ・ルビオの各所属機関と同じ国立人類学歴史学研究所の所管の図書館であることから交渉は比較的容易であった。結果的に、ブリート・グアダラマ館長 Dr. Baltazar Brito Guadarrama とのやり取りによって画像提供を受けることができた。テキサス大学の写本に関しては、所定の手続きに沿ってマイクロフィルムを入手し、そのマイクロフィルムを筆者が日本へ持ち帰って研究室のデジタル・マイクロフィルム・スキャナーで電子化した後、メキシコでの転記作業が進められた。

PCM を実現する上でとりわけ大きな課題の一つは、成果物を置くための電子上のスペースの確保であった。様々な経緯の末、専修大学のウェブページ上に置くことが可能となった。プラットフォームについては、2017 年度には外部業者にその基礎部分の製作を依頼した。その後、井上ゼミ生をはじめとするアルバイトの専修大学生が手作業で何百ものページをコピーし、サイズや形式を整えた写本の画像ファイルおよび転記テキストの PDF ファイルをそれらの各ページにリンクさせるという作業を進めた<sup>4)</sup>。2018 年度にはこの作業を継続するとともに、業者にはプラットフォームの修正作業を進めてもらった。結果、2019 年春には暫定的に公開するコンテンツの準備が整った。さらに、2019 年度には専修大学研究助成（個人研究）を受け、残る作業を継続した。最終的に、2020 年 3 月の時点で二つの写本（AGN 写本と BNAH 写本）の画像と転記テキスト、さらにもう一つの写本（テキサス大学写本）の転記テキストを公開するに至った。

これらの作業と並行して、当該分野の専門家による研究論文のページを作成することにした。バトコックが原稿依頼と編集作業を主に担当し、アルバラード・テソソモクおよび『クロニカ・メヒカーナ』に関する最新の文献一覧と合わせて研究論文を公開することとなった。研究論文については、メキシコの研究機関に属する研究者（Dr. José Rubén Romero Galván, Dra. Patricia Escandón, Dra. Clementina Battcock, Dr. Salvador Rueda Smithers, Dr. Sergio Ángel Vásquez Galicia）のみならず、イタリア（Dr. Sergio Botta）、アルゼンチン（Dra. Valeria Añón）、日本（筆者）の研究者が執筆を担当した。これらは当該分野の国際的な専門家による文章ではあるものの、学部生や大学院生な

ど初めてこの史料に触れる読者にとっても理解しやすい内容を目指した。

ウェブ上に公表した成果物は、英語と日本語で概要を示すページを設けたものの、本編はすべてスペイン語とした（図 1）。ページ上部もしくは右上の操作ボタンから *Introducción* (概要説明)、*Estudios* (研究論文)、*Crónica mexicana* (写本と転記テキスト)、*Coordinadores* (コーディネーター紹介)、*Agradecimientos* (謝辞) というそれぞれのページに入ることができる。

写本と転記テキストを公開するページでは、画面左側に手稿の写真（画像ファイル）、右側に転記テキスト（PDF ファイル）が表示されるようなレイ



図 1：PCM トップページ

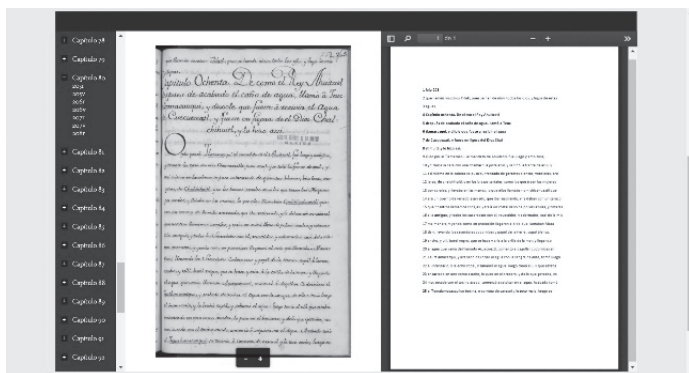


図 2：『クロニカ・メヒカーナ』掲載ページの例

アウトとした（図2）。写真および転記テキストは任意で拡大・縮小が可能である。各写本の各葉を順に読み進むことも可能であるが、画面の左側には、表示中の写本のそれぞれの章 **capítulo** へのリンクを用意した。これにより、全 110 章のうち各章が始まる箇所へ直接移動することができる。

研究論文のページについては、各論文の一覧が表示されるようにし、それぞれの論文は PDF ファイルの形で掲載した。また、大半の研究論文についてプロのアナウンサーがその内容を読み上げた音声ファイルを付し、視覚障害者にも配慮した内容とすることができた<sup>5)</sup>。

2019 年度には、本プロジェクトを広く知ってもらうための活動も積極的に進めた。暫定公開の段階ではあったものの、2019 年 8 月 15 日にメキシコ市トラルパン区の国立人類学歴史学研究所歴史研究部で本プラットフォームの発表会見を行った（図3）。国立人類学歴史学研究所のプリエト・エルナンデス所長 Dr. Diego Prieto Hernández、在メキシコ大使館の高瀬寧全権大使らの列席を賜り、多数の参加者が来場した。その様子はインターネットでもライブ配信されたのに加え、メキシコ国内の主要マスコミにも取り上げられた。また、事後には、専修大学関係の各種媒体や、メキシコ歴史学協議会の季報などにおいても取り上げられた<sup>6)</sup>。

この発表会見にあわせて、メキシコの国立人類学歴史学研究所のラジオ局（Radio INAH）の番組「私たちの記憶 **Somos Nuestra Memoria**」に筆者が出演



図3：国立人類学歴史学研究所  
での発表会見



図4：在東京メキシコ大使館での発表

し、約 60 分に亘って『クロニカ・メヒカーナ』とそれを取り巻く時代背景について話をする機会を得た<sup>7)</sup>。また、同年 11 月 9 日には、東京・永田町のメキシコ大使館でも成果公表のイベントを実施した。上記科研プロジェクトの代表者であった青山和夫先生に科研プロジェクトの概要をお話いただき、筆者は PCM の概要と使い方について説明を行った。この発表会にも研究者のみならず多くの一般の参加者の来場を賜ることができた（図 4）<sup>8)</sup>。

## 2. メキシコ史研究と『クロニカ・メヒカーナ』

先述の通り、『クロニカ・メヒカーナ』はアステカ王国期の歴史を綴った文書である。しかしながら、この文書の研究の進展は、先スペイン期研究だけに資するわけではない。ここでは、『クロニカ・メヒカーナ』がメキシコ史のそれぞれ異なる時代の研究に寄与する例として、3 つのテーマについて見ていくこととしたい。

### (1) アステカ王国史研究と『クロニカ・メヒカーナ』

20 世紀を通してアステカ王国期に関する研究は飛躍的に進み、現在に至るまで様々な新たな知見がもたらされ続けている。こうした研究状況の下、情報源として用いられる文書史料についても見直されなければならない。後古典期後期の歴史を再構成するための情報源として早くから利用されてきた『クロニカ・メヒカーナ』も、現在の研究の進展に見合った形で使用することで、より有効に活用できると筆者は考える。その際、以下の二つの特質を踏まえておくことが有効であろう。

第一に、征服後に書かれた「史料」が厳密には同時代史料ではない点をあらためて確認しておく必要がある。かつては「貴重な先住民の証言」として盲目的に使用されることも多かったが、現在では『クロニカ・メヒカーナ』についての研究が進んだことから、時に批判的な眼差しをもって情報源として使用することが求められると言えるだろう。

『クロニカ・メヒカーナ』は、アステカ征服（1519～21 年）から 70 年以

上を経てスペイン語で書かれた。解釈の難しいナワトル語の語句も多く含まれているものの、当然ながらある種の文化的翻訳や文化的適応が伴っていたことに留意が必要となる。いくつか例を見ておきたい。まず、『クロニカ・メヒカーナ』の叙述は、数葉ごとに章分けがなされ、各章の冒頭には「本章では…について述べる」といった文言が見られる<sup>9)</sup>。征服以前のメソアメリカには、トピック毎に「章」に分割して歴史を記録するという習慣はなかった。つまり、この様式はスペイン人のクロニカを意図的に模倣したものと思われる。次に、「思慮深い読者なら当地ヌエバ・エスパーニャで目にしたことがあるだろう花々」、「今日では我々がグアダルーペの聖母の名がついている丘」、「大聖堂が位置する広場に現在あるクアウシカリ」といった表現が本文中に見られる。このことは、『クロニカ・メヒカーナ』で描写されている歴史が、16世紀末の読者を対象としたものであり、その目的に適った補足的説明が随所で加えられていることを示している<sup>10)</sup>。さらには、キリスト教信者の立場から征服以前の歴史が語られている点にも注意が必要である。『クロニカ・メヒカーナ』が編まれた当時の社会では、メソアメリカの多神教の神はもはや神ではあり得なかった。キリスト教化が急速に進んだ結果、メシーカ人の守護神ウィツィロポチトリは「悪魔」と見なされるしかなかった。実際、『クロニカ・メヒカーナ』では、ウィツィロポチトリはスペイン語の「悪魔 *diablo*」やナワトル語の「テツァウィトル *tetzahuitl*」などと表現されている<sup>11)</sup>。

このように、『クロニカ・メヒカーナ』に記されている歴史的内容は、征服後の西欧からの文化的要素、とりわけキリスト教徒の立場で先スペイン期の事象を叙述するというフィルターを介したものである。それゆえ、『クロニカ・メヒカーナ』の記述の一字一句を鵜呑みにすることには慎重でなければならない。この点を踏まえつつ、他の歴史記録や考古資料と突き合わせながらアステカ王国期の歴史を復元しようとすることで、『クロニカ・メヒカーナ』の史料としての価値はいっそう高くなると言える。

第二に、『クロニカ・メヒカーナ』に記述されているのは、客観的なアステカ王国期の歴史ではなく、特定の、しかも極めて重要な中核集団の視点を反映した内容のものである点を考慮する必要がある。現在、我々がアステカ王国（あるいは帝国）と呼ぶ政体は、実際には唯一の王や皇帝が支配するよう

な「王国」（もしくは「帝国」）ではなかった。ナワトル語ではエシュカン・トラトロヤン *excan tlatoľoyan*（ナワトル語で「三つの場所の支配」）と呼ばれたその政治体制は、テノチティトラン、テツココ、トラコパンというそれぞれに王を有する都市国家の連合に基づいていた。15 世紀前半にこの三都市同盟が成立した後、1 世紀足らずの間にテノチティトランは三都市同盟という形式を維持しつつも主導的な立場を築いた。テノチティトランに居住していた部族集団がメシーカ人であり、テツココのアコルワ人、トラコパンのテパネカ人、あるいはメキシコ盆地の他の都市国家の集団（ショチミルコ人、チャルコ人、クルワ人、オトミー人など）とは異なるアイデンティティを保持していた。『クロニカ・メヒカーナ』を編んだアルバラード・テソソモクは、メシーカ人であるのみならず、支配を急速に拡大したメシーカ王家に属し、母方の血をたどればモテクソマ・ショコヨトルの孫、父方はアシャヤカトルの曾孫であった<sup>12)</sup>。

このように、『クロニカ・メヒカーナ』は、イツコアトル期以降に覇権を打ち立てたテノチティトランの王家の立場から歴史を記述したものである。換言すれば、メシーカ人から見た出来事の記録であると同時に、テノチティトランおよびメシーカ人の偉大さを強調する内容が含まれている可能性を考慮して読む必要がある。とりわけ、テツココやトラスカラなど他の都市国家の情報も得られる場合には、それらと照合することでより客観的な歴史的情報が得られるだろう。

## （2）植民地時代先住民の研究と『クロニカ・メヒカーナ』

植民地時代の先住民社会の研究は、ここ数十年で飛躍的に進んだ。この間、『クロニカ・メヒカーナ』を含む先住民クロニカは植民地時代史の先住民社会を知るための史料として用いられるようになったが、その現状について簡潔に見ておきたい。

手稿や写本の形で長らく伝えられた先住民史料は、19 世紀以降に初めて出版された。とりわけ 20 世紀に先住民の歴史記録の出版が進んだものの、それまでの伝統的な歴史研究においては、コンキスタドールや宣教師など西欧人が書いたクロニカにより大きな信頼が置かれていた。例えば、19 世紀に大部

な『メキシコ征服』を上梓し好評を博したウィリアム・H・プレスコットは、アルバ・イシュトリルショチトルの記録について、些細な出来事やありそうもない出来事の記述が多く、年代の混乱が激しいといった「彼の時代に由来する欠点」を問題点として挙げている<sup>13)</sup>。

こうした伝統的な見方からの転換点となったのは、1959年にメキシコの歴史研究者ミゲル・レオン＝ポルティージャが出版した『敗者の視点——征服に関する先住民による報告』であった<sup>14)</sup>。その後、1970年代～80年代頃からは先住民史料の出版が増加し、とりわけ1990年代以降は個々の先住民クロニカの分析が大幅に進んだ<sup>15)</sup>。こうした変化は、以下の二つの新たな観点を植民地時代先住民の歴史研究にもたらすことにつながった。

一つめは、征服後の社会における歴史記述や歴史的言説を巡る分析が、個々の記録者の生きた環境や社会を明らかにすることにつながってきたという点である。『クロニカ・メヒカーナ』に関しては、ロメロ・ガルバンがこのクロニカとアルバラード・テソソモクの生きた時代を論じた研究書を2003年に出版した<sup>16)</sup>。また、2010年代に入り、アルバ・イシュトリルショチトルとテスココ社会を関係づけて論じたりする研究成果もこの流れの中にあると言える<sup>17)</sup>。こうした研究の動向は現在も積極的に進められており、今後のいっそうの研究成果の報告が待たれる<sup>18)</sup>。

もう一つは、文献学や史料論といった角度から個々の文書ならびに関連する文書との関係を解き明かそうという研究が進められてきた点である。各文書の分析が進むことで、複数のクロニカ間での情報の共有、先に書かれたクロニカの記述内容が別のクロニカの中で再利用されたことなど、クロニカ間の関係性が論じられてきた。3.で述べる『クロニカ X』に関わる問題はそうしたテーマの中で重要なものの一つであるが、『クロニカ・メヒカーナ』を詳細に見ていくことが今度いっそう求められる。また、同じくアルバラード・テソソモクが書いたとされるナワトル語の『クロニカ・メシカヨトル』も含めた関係性の議論は明確な結論を見ていないものの、いっそうの研究の進展が期待される<sup>19)</sup>。

### (3) ナショナリズムと『クロニカ・メヒカーナ』

『クロニカ・メヒカーナ』が後世に与えた影響については、現時点であまり研究がなされていない。しかしながら、植民地時代に芽生えたクリオーリョ愛国主義や、独立期以降に確立されていったメキシコ・ナショナリズムという観点からの研究において、『クロニカ・メヒカーナ』は他のいくつかの先住民記録と並んで重要な意味を持つことになるだろう。

『クロニカ・メヒカーナ』が初めて印刷・公刊されたのは、19世紀後半のマヌエル・オロスコ・イ・ベラによる版であった。同じ19世紀に初めて出版されたディエゴ・ムニョス・カマルゴ Diego Muñoz Camargo の『トラスカラ史 *Historia de Tlaxcala*』やフェルナンド・デ・アルバ・イシュトリルショチトル Fernando de Alva Ixtlilxóchitl の『第13報告書 *Decimatercia relación*』<sup>20)</sup>と並び、「現代メキシコ人」に早くから読まれた先住民クロニカであった。加えて、植民地時代に公刊されることはなかったとはいえ、先住民史料としては独立以前にも比較的良好に参照される文書だったと考えられる。

オロスコ・イ・ベラ版の『クロニカ・メヒカーナ』は、PCM で公開した AGN 所蔵の写本に基づいたもので、現在もポルーア書店の叢書の一冊として版を重ねている<sup>21)</sup>。この写本は18世紀に作成されたマリアノ・ベイティア Mariano Fernández de Echeverría y Veytia<sup>22)</sup>の写本に基づくもので、ベイティア写本の基になったのは、17世紀前半にロレンツォ・ボトゥリーニ Lorenzo Boturini Benaduci<sup>23)</sup>が所有したものであった。その一方、1997年にはワシントン D. C. のアメリカ議会図書館で保管されているクラウド・コレクションの手稿に基づいた版がスペインで出版された<sup>24)</sup>。この手稿も写本と考えられるが、現存する写本としては最も古く、上述のボトゥリーニが所有していたものであることがわかっている。他方、これらの写本の流れとは別に、17世紀にアルバ・イシュトリルショチトルがおそらくは所有し、その後カルロス・デ・シグエンサ・イ・ゴンゴラ Carlos de Sigüenza y Góngora の手に渡った別の手稿（おそらくは写本）が存在したと考えられる。この手稿は、シグエンサ・イ・ゴンゴラの死後、イエズス会のサン・ペドロ・イ・サン・パブロ学院に保管され、18世紀にはイエズス会士の歴史家フランシスコ・ハビエル・クラビヘロ Francisco Javier Clavijero が参照したものと思われる<sup>25)</sup>。

以上の経緯からわかるように、『クロニカ・メヒカーナ』は植民地時代の主要なクリオーリョ著述家によって参照された。そして、19世紀後半の出版を経て現代メキシコの知識人にもしばしば参照された先住民クロニカの一つであると言える。

『クロニカ・メヒカーナ』と同様に植民地時代から現代まで広く読まれ続けた先住民史料として、アルバ・イシュトリルショチトルの残した複数のクロニカがある。別稿で論じたように、17世紀初頭に彼のクロニカで提示された「詩人王」ネサワルコヨトル像は、17世紀後半から18世紀のクリオーリョの歴史記述に大きく影響し、さらには20世紀後半や21世紀初頭においても「詩人王」のイメージが再生産し続けられることにつながった<sup>26)</sup>。この事例からもわかるように、先住民クロニカの記述は、植民地時代後半や独立後の知識人や著述家にしばしば影響を与えてきた。

植民地時代のクリオーリョや独立国家期のメキシコのエリート層がアステカ王国の歴史を取り入れてきたことを考えれば、『クロニカ・メヒカーナ』の後世への影響についての具体的な事例研究が待たれる。今後、進展が見込まれる研究テーマとして、さしあたり以下の二つを挙げることができる。

第一に、『クロニカ・メヒカーナ』が植民地時代のクリオーリョの歴史記述に与えた影響を考察することは、彼らの愛国主義が醸成された経緯について新たな知見をもたらし得る。17世紀のシグエンサ・イ・ゴンゴラ、18世紀のボトゥリーニやクラビヘロに加え、ベイティア、さらにはフアン・ホセ・エギアラ・イ・エグレン Juan José de Eguilar y Eguren<sup>27)</sup>、フランシスコ・ガルシア・フィゲロア Francisco García Figueroa<sup>28)</sup>といった人物が『クロニカ・メヒカーナ』を参照したり写本を所有したりした。彼らの多くは、自身の著作の中でも先スペイン期について書き記している。17～18世紀のクリオーリョによって、アルバラード・テソソモクの残した情報はどのように解釈されたのか。彼らの歴史観やアイデンティティの形成に『クロニカ・メヒカーナ』は何らかの影響を与えたのか。クリオーリョ愛国主義の高まりの中でメシカー人のいかなる歴史的事象が好んで取り上げられたのか。今後、こうした点の検証が進むことが期待される。

第二に、独立期および独立後の知識人による『クロニカ・メヒカーナ』の

利用も興味深い研究テーマである。独立国家としてのメキシコが「アステカの過去」を自国史の一部に取り込んでいったことはよく知られる。しかしながら、その詳細な経緯を明らかにする研究は手つかずの状態にある。いかなる史料の情報に基づいていかなる内容が「メキシコ国民の歴史」に取り入れられていったのか。神話と歴史の切り分けはどのようになされていったのか。メシーカ中心の史料と非メシーカの史料が示す矛盾をどのように選別し、情報を取捨選択していったのか。個別の事例研究となり得るテーマは数多く存在するように思われる。

こうしたテーマに関して、『クロニカ・メヒカーナ』は特にこれからの研究に開かれた可能性を持っていると言えるだろう。PCM で公開した複数の写本は 19 世紀のものであり、17 世紀のクラウド手稿との異同等の比較から新たな情報を引き出せる可能性がある。

### 3. 先住民クロニカ研究と『クロニカ・メヒカーナ』

ここでは、筆者の専門である植民地時代の歴史記述の研究の現状と其中での『クロニカ・メヒカーナ』の位置づけを考察しておきたい。以下では、当時のスペイン人ならびに先住民のクロニカについて概観し、その後、アルバラード・デソソモクおよび『クロニカ・メヒカーナ』の研究上の意義について論じることとする。

そもそもクロニカとは、大航海時代においてヨーロッパ人が書き残した記録文書類を指す。その内容は多岐にわたり、航海や探検の記録や征服の歴史、現地の歴史や地誌、自然誌なども含まれる。メキシコに関しては、エルナン・コルテスやベルナル・ディアス・デル・カスティージョのようなコンキスタドールが記したクロニカが複数知られる。また、トリビオ・デ・モトリニア、ディエゴ・ドウラン、バルトロメー・デ・ラス・カサス、ホセ・デ・アコスタ、ヘロニモ・デ・メンディエタ、フアン・デ・トルケマダなどの修道士が残したクロニカは実に数多く存在する。他にも、アロンソ・デ・ソリタやセルバンテス・デ・サラサルのように、征服後に現地に渡った官吏

や学識者が著したものもある。加えて、フランシスコ・ロペス・デ・ゴマラのように、現地に渡航経験のない人物が書いたクロニカも存在する。

その一方で、現地の先住民やその子孫がアルファベットを使って先スペイン期や征服期の歴史などを綴ったクロニカは、一般に「先住民クロニカ *crónicas indígenas*」と総称される。アメリカ大陸の二大文明圏であったメソアメリカとアンデスを比較すると、メソアメリカにおいてとりわけ 16～17 世紀の先住民クロニカが多いことは注目に値する。アンデスについては、『新しい記録と良き統治』を書いたフェリペ・グアマン・ポマ・デ・アヤラが知られるが、彼以外にクロニカを書き残した先住民の血を引く人物としては、エル・インカ・ガルシラソ・デ・ラ・ベガとフアン・サンタクルス・デ・パチャクティ・ヤムキが知られるに過ぎない<sup>29)</sup>。対して、メソアメリカでは、アルバラード・テソソモクの他に、ガブリエル・デ・アヤラ *Gabriel de Ayala*、先述のムニョス・カマルゴ、フアン・パウティスタ・デ・ポマール *Juan Bautista de Pomar*、クリストバル・デル・カステージョ *Cristóbal del Castillo*、先述のアルバ・イシュトリルショチトル、ドミンゴ・チマルパイン・クアウトレワニツィン *Domingo Francisco de San Antón Muñón Chimalpain Cuauhtlehuauitzin*、フアン・ブエナビントゥーラ・サパータ・イ・メンドサ *Juan Buenaventura Zapata y Mendoza* など多数の先住民クロニスタ（クロニカ作成者）が知られている。

これらの史料は上述の「先住民クロニカ」という包括的な名称の他に、「先住民および混血のクロニカ *crónicas indígenas y mestizas*」と呼ばれたり、「先住民伝統の歴史書 *historias de tradición indígena*」と呼ばれたりすることもある。筆者は「先住民」と「混血」のようなカテゴリー分けには異論があるが、いずれにせよ、これら文書群は征服以前の先住民社会に関する重要な情報源である。

だが、それと同時に、先住民クロニカは、スペイン支配下における「西洋化」の過程を示す史料でもある。その「西洋化」とは、多様だった先住民諸集団の社会が一様にヨーロッパのようになったことを含意するわけではない。ここで扱う先住民クロニスタの中には、より先住民文化の影響の濃い環境で生まれ育った者もいれば、より都会的でスペイン的な社会環境に身を置いた者もいた。血の面においても、純粋な先住民の血統に属する者もいれば、メ

スティソやカスティソといった混血者もいたが、混血であればよりスペイン的だったとは限らない。記録を残した言語についても、スペイン語を使用した者もいれば、アルファベット表記のナワトル語やその他の先住民語、さらにはその両方を駆使した者もいる。時期的にも征服直後から 17 世紀のものまであり、征服戦争を体験した世代の記録者もいれば、征服後半世紀や 1 世紀経ってから生まれた者もいる。このように、クロニスタの出自や執筆時期は様々であるものの、征服後にラテン文字を用いて先住民の歴史や文化について書かれたのが先住民クロニカあり、スペイン植民地支配という文脈から切り離すことができない。

こうした植民地時代の歴史的な文脈として、先住民クロニカを読む上で考慮すべき文脈は少なくとも二種類存在する。一つめは、植民地支配下における先住民の歴史記述であり、二つめは、植民地時代の歴史記述全般という文脈である。

まずは、植民地時代の先住民の歴史記述という文脈を見ておきたい。先住民貴族の子孫らがスペイン支配下で書いたこれら文書は、意図的に集団で編纂されたものではなかった。しかし、散発的なものでもなく、少なくともメキシコ中央部に関しては、征服直後に一定程度維持された先住民貴族層の特権が急速に失われていった 16 世紀半ば以降に目につくようになり、16 世紀末から 17 世紀初頭に特に集中して書かれた。

先住民クロニカの中には、情報源に言及しているものもある。そうした情報源には、絵文書の情報や古老などの証言の他に、先に書かれたクロニカが情報源となっている場合も見られる。アルバ・イシュトリルショチトルを例に見ておきたい。彼はクロニスタであると同時に、先住民史料の収集家でもあった。彼の蔵書には、ポマールの『テスココ報告書』や同じくポマールが編んだとされる『ヌエバ・エスパーニャの領主たちのロマンセ』があった。また、アルバ・イシュトリルショチトルはポマール以外の既存の史料も利用しており、彼のクロニカにはアロンソ・アシャヤカやタデオ・デ・ニサへの言及が見られる<sup>30)</sup>。

もう一つの例として、アルバラード・テソソモクがナワトル語で著した『クロニカ・メシカヨトル』についても見ておきたい。この史料が現存するのは、

チマルパインが写本を残したからに他ならない。現在に伝わる写本の文面には、記述内容にチマルパインが介在していることが見てとられる。例えば、「私ことドミンゴ・デ・サン・アントン・ムニョン・チマルパインは、メシーカ人の暦の計算の書を精査し、上述の2の輩の年すなわち1299年には、かのココシュトリはクルワカンの統治者であったことを確認した」<sup>31)</sup>といった箇所が見られ、元の情報にチマルパインが修正を加えているケースがある。

このように、ボマールとアルバ・イシュトリルショチトル、アルバラード・テソソモクとチマルパインの例は、先住民のクロニカの間で情報の流用や再利用が起こっていたことを示唆している。換言すれば、個々のクロニカが先スペイン期の「純粋な」情報を書き写したものとは限らない。それどころか、同じ記述や類似した内容が情報の再利用を経て書き記されていることもしばしばあることを我々は認識しておかなくてはならない。

次に、こうしたクロニカ間の関係性は、先住民クロニカの間に限定されるわけではないという点も重要である。先住民クロニスタたちは、個々の環境の違いがあるとはいえ、何らかの形でスペイン人の知的・文化的社会とつながっていた。例えば、修道士による教育を受けたクロニスタ、教会関係の業務に従事したクロニスタ、ナワトル語通訳として働いていたクロニスタ、さらにはスペイン人修道士と共同で史料解説に当たった者もいた。

こうした点についても具体例を見ておきたい。チマルパインは様々な先住民由来の史料を集めてアルファベット表記のナワトル語で年代記をまとめたが、その一方で、当時の有名なスペイン人の著作であるロペス・デ・ゴマラの『メキシコ征服 *La conquista de México*』<sup>32)</sup>の写本を作成している。しかしながら、チマルパインは忠実な写しを作成したのではなく、時に内容を加えるなどの修正を行っている。さらに、彼がスペイン人の著作に含まれる内容を自身の記述に取り込んだケースがあったこともわかっている。例えば、チマルパインの年代記の中には、エンリコ・マルティネスの『天文学およびヌエバ・エスパーニャの自然誌 *Reportorio de los tiempos, y historia natural desta Nueva España*』の抜粋がナワトル語訳で記されている箇所がある<sup>33)</sup>。また、アルバ・イシュトリルショチトルに目を向けると、上述のロペス・デ・ゴマラの書は、エレーラ・イ・トルデシージャスの年代記と並んで彼のクロニカ

の中で言及されている<sup>34)</sup>。彼は、とりわけロペス・デ・ゴマラを信頼に足る情報源と見なしており、個別の事象に関してロペス・デ・ゴマラの書物を基に出来事の描写を行っていると考えられる箇所すらある<sup>35)</sup>。

このように、先住民クロニスタたちは、我々の想像以上にヨーロッパの著述家の作品に接していたと思われる。『クロニカ・メヒカーナ』について上で指摘したように、短い要旨を伴う章立てがなされていたり、作者が一人称で読み手の信頼性を得るような文言を挿入するのは、そうした影響の一例と言える。

ここまで見たように、先住民クロニカを見る上では、先住民クロニスタやクロニカ間の関係性に加え、スペイン人の記録との関係性も意識する必要がある。いずれの場合も、先に作成されたクロニカの情報を再利用したり、その情報を記述内容の裏づけに使ったり、さらにはそうした情報を再解釈して「歴史的事実」として提示するといったことがなされていた。

以上のような先住民クロニカの特徴を踏まえ、『クロニカ・メヒカーナ』およびアルバラード・テソソモクの位置づけをあらためて考えてみたい。アルバラード・テソソモクは、1521年8月のテノチティトランの陥落から十数年後に誕生した。その生年について確実な情報はないが、これまでの研究で示されている議論の範囲では、1537～38年に生まれたという可能性が高い<sup>36)</sup>。この生年は、先住民クロニスタの中では早い方である<sup>37)</sup>。だが、征服後ほどなくして生まれたからといって、必ずしもスペイン人の世界との接触が少なかったとは言えない。アルバラード・テソソモクはテノチティトランのメシーカ王家の中枢にいる人物で、征服後のテノチティトランのトラトアニ兼統治官（フエス・ゴベルナドール）を務めたディエゴ・ワニツィンの息子であった。すなわち、彼は征服以前に支配の中枢であったメシーカ王家の中心部にいる人物であり、スペイン人からも一目置かれる存在だったと思われる。実際、1600年には、フアン・カノが副王の前でメキシコ征服を再現した小劇を上演したが、この際にモテクソマ・ショコヨトル役として興に乗っていたのはアルバラード・テソソモクその人であった<sup>38)</sup>。

『クロニカ・メヒカーナ』は、テノチティトランの王家の公定史とも言うべき歴史叙述であり、メシーカ人の栄光の歴史が綴られている。しかしなが

ら、このクロニカは、植民地時代初期の段階でスペイン系の歴史叙述と先住民系の歴史叙述が交叉した典型的なケースの一つでもある。スペイン人のクロニカとの関係を示すこの点について、少し詳細を見ておきたい。

『クロニカ・メヒカーナ』を含む16世紀後半に書かれた複数のクロニカの関係性は比較的早い段階から論じられてきた。具体的には、アルバラード・テソソモクの『クロニカ・メヒカーナ』に加え、『ラミーレス文書 *Códice Ramírez*』、イエズス会士フアン・デ・トバルの『インディオの起源に関する報告書 *Relación del origen de los indios...*』、ドミニコ会士ディエゴ・ドゥランの『インディアス誌 *Historia de las Indias de Nueva España e islas de la Tierra Firme*』、イエズス会士ホセ・デ・アコスタの『インディアス自然文化史（新大陸自然文化史） *Historia natural y moral de las Indias*』の関係性である。これらのクロニカは、1945年にR・H・バーロウが『クロニカ X *Crónica X*』と名付けた共通の情報源を元にしてしているとされる<sup>39)</sup>。しかしながら、『クロニカ X』そのものは現存せず、その形式や内容については、複数の説が提唱されている。『クロニカ X』の正体についてここでは詳細には踏み込まないものの、筆者は『クロニカ X』が必ずしもアルファベット文書ではなく、ある種の「口承伝統」だった可能性もあると考えている<sup>40)</sup>。

上記の五編のクロニカのうち、トバルが関わった二編（『ラミーレス文書』と『インディオの起源に関する報告書』）は、ドゥランのクロニカから派生し、さらに、アコスタのクロニカの内容はトバルから派生したと考えられる。換言すれば、『クロニカ X』の情報をもとに書かれたのは、アルバラード・テソソモクの『クロニカ・メヒカーナ』とドゥランの『ヌエバ・エスパーニャ誌』の二編である。そして、ドゥランの記述<sup>41)</sup>とアルバラード・テソソモクの記述を比較すれば、驚くほどの類似が認められる。こうした類似は、スペイン人のクロニカと先住民の血を引く作者のクロニカの間で明確な接点があった早い時期の事例と言える。

以上のように、『クロニカ・メヒカーナ』は、先住民世界の文脈ではメシーカ人の観点から見た歴史の典型であるものの、それと同時にスペイン人が書いたクロニカとの接点を示す事例でもある。アルバラード・テソソモクについての歴史的な情報は決して多くないものの、『クロニカ・メヒカーナ』は先

住民のみならずヌエバ・エスパーニャの歴史記述全体を論じていく上で、欠かすことのできない重要なクロニカだと言える。

## おわりに

本稿では、PCMの概要を示したうえで、メキシコ史研究において『クロニカ・メヒカーナ』が持つ可能性、さらには、植民地時代の歴史記述を研究する上での同文書の意義について具体的に論じた。同クロニカが先スペイン期の研究のみならず、植民地時代や近現代の歴史研究にも重要な史料としての役割を果たし得ることを指摘した。加えて、植民地時代のクロニカ研究でのこの文書の意義を考察し、植民地時代前半に残された歴史叙述を考える上で、先住民クロニカの中での『クロニカ・メヒカーナ』の意義のみならず、スペイン人による歴史記録との関係性においてもその位置づけを考察した。

スペイン人征服者コルテスがメキシコ湾岸に最初に上陸したのは1519年のことであった。その後、二年以上の時間を費やし、1521年8月にクアウテモクが捕らえられたことで、「アステカ王国の征服」は完了した。言い換えれば、本稿を執筆している2020年12月、および本稿が出版される2021年3月のちょうど500年前には、まさしくこのアステカ王国征服が進行中であった。

新型コロナウイルスの蔓延で停滞している部分はあるものの、テノチティトラン陥落から500周年を迎える2021年には、メキシコの征服に関する講演会やシンポジウム等がメキシコ国内外で多く開催されることが見込まれる。こうしたイベントが相次ぐ中で、アルバラード・テソソモクや彼の『クロニカ・メヒカーナ』に言及される機会も増えるものと思われる。本稿で見てきたように、『クロニカ・メヒカーナ』は今後新たな研究の進展のための様々な可能性が開けている。それゆえ、従来の「伝統的な」歴史解釈をただ再生産し続けるにとどまらず、21世紀前半の現在に相応しい新たな歴史的な解釈が提示され、研究の新たな成果の蓄積として次世代に伝えられていくことが必要となるだろう。その上で、『クロニカ・メヒカーナ』をはじめとする史料の

利用やさらなる研究は欠かすことができない。新史料の発掘や利用が新たな知見をもたらす得ることは言うまでもない。だが、既知の史料を丹念に読み直し、これまでの研究で等閑視されてきた見方や新たな情報を導き出すことも求められていることを確認して本稿を締めくくるとしたい。

謝辞： 本稿は平成 31 年度／令和元年度専修大学研究助成（個人研究）『『クロニカ・メヒカーナ』の分析および写本の研究用ウェブページ作成』、および平成 29～30 年度科研費補助金（新学術領域研究）「古代アメリカの比較文明論」（代表：青山和夫，JP15K21760）の研究成果の一部である。

---

<sup>1)</sup> 現存する写本では 110 章しかないが、これは第 4 章と第 5 章に該当する原稿が欠落したまま写本となって伝えられたためと考えられている。Hernando de Alvarado Tezozomoc, *Crónica mexicana*. Ed. de Gonzalo Díaz Migoyo y Germán Vázquez Chamorro, Madrid, Historia 16, 1997, p. 19.

<sup>2)</sup> 2020 年 12 月現在、次の URL で公開中である。<https://www.senshu-u.ac.jp/research/mexicana/>

<sup>3)</sup> 同会議での報告内容は、メキシコ国立自治大学人類学研究所（Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México）から研究書として出版される予定である。

<sup>4)</sup> 文学部井上ゼミ（当時）の那須瑞穂さん、島松友香さん、神山里穂さん、梅田研さん、さらには、経済学研究科の木下千尋さん、経済学部野村帆乃香さんがこれらの作業を集中的に進めてくれた。記して感謝したい。

<sup>5)</sup> これらの音声ファイルについては、後述のラジオ局（Radio INAH）の協力を得た。同局の関係者に感謝申し上げる。

<sup>6)</sup> 『Si-Report 専修大学のビジョンと現状』Vol. 15, 2020 年、6 頁（<https://www.senshu-u.ac.jp/albums/abm.php?d=17&f=abm00015568.pdf&n=Si-report-vol.15.pdf>）；毎日新聞、大学倶楽部・専修大「メキシコの歴史書『クロニカ・メヒカーナ』写本 デジタル化し公開」2019 年 10 月 10 日（<https://mainichi.jp/univ/articles/20191003/org/00m/100/008000c>）；Comité Mexicano de Ciencias Históricas, *Boletín del CMCH*, núm. 439, 2019, pp. 2-4（<https://cmch.colmex.mx/images/boletines/boletin-439.pdf>）。

<sup>7)</sup> 2020 年 12 月現在、発表会見およびラジオ番組は動画（会見：<https://www.youtube.com/watch?v=A-cA6RBA1JM&t=1917s>，ラジオ番組：<https://www.youtube.com/watch?v=h6tk9IxyiU&t=3079s>）でも配信されている。

8) 加えて、古代アメリカ学会第 24 回研究大会（2019 年 11 月 30 日）、文化遺産国際協力コンソーシアムの第 14 回中南米分科会（2020 年 8 月 26 日）でも本プロジェクトの成果を報告した。

9) 例として、第 39 章の冒頭には以下のように記されている。「ここでは、モンテスマ王がグアシャカ〔オアハカ〕の人々に対して行った戦争、その原因と理由、そして彼らをいかにしてメシカ王室に服従させたかについて述べる」。Alvarado Tezozomoc, *Crónica mexicana*, 1997, p. 178.

<sup>10)</sup> Alvarado Tezozomoc, *Crónica mexicana*, 1997, pp. 25, 301, 345.

<sup>11)</sup> ナワトル語のテツァウィトルは「驚嘆すべきもの、畏怖に値するもの」を意味する。アルバラード・テソソモクの文面では、「悪魔 *diablo*」に加え、「迷信 *abusión*」というスペイン語の表現も用いられていることから、必ずしも肯定的な意味でテツァウィトルの語を使用していたとは言い切れない。

<sup>12)</sup> モテクソマ・ショコヨトル（モクテスマ 2 世、在位 1502～20 年）はスペイン人到来時のメシカ王。アシャカトル（在位 1469～81 年）はその三代前のメシカ王。

<sup>13)</sup> William H. Prescott, *The Conquest of Mexico*. Boston, Dana Estes & Company, 3 vols., 1873, Vol. I, pp. 206-207.

<sup>14)</sup> Miguel León-Portilla, *La visión de los vencidos. Relaciones indígenas de la conquista*. México, Universidad Nacional Autónoma de México, 23 ed., 1992. 同書は邦訳もなされている。ミゲル・レオン=ポルティエヤ『インディオの挽歌——アステカから見たメキシコ征服史』山崎眞次訳、成文堂、1994 年。

<sup>15)</sup> 1990 年代～2000 年代にかけてロメロ・ガルバン、ナバレテ・リナーレス、パストラーナ・フローレス、バトコック、井上などにより、個別の先住民クロニカの分析や先住民クロニカの位置づけを巡る論考や研究書が多く出版されてきた。そのいくつかの例としては下記の文献が挙げられる。José Rubén Romero Galván (coord.), *Historiografía mexicana I: Historiografía novohispana de tradición indígena*. México, Instituto de Investigaciones Históricas, Universidad Nacional Autónoma de México, 2003; Danna Levin y Federico Navarrete (coords.), *Indios, mestizos y españoles. Interculturalidad e historiografía en la Nueva España*. México, Universidad Autónoma Metropolitana-Azcapotzalco/Universidad Nacional Autónoma de México, 2007; Miguel Pastrana Flores, *Historias de la conquista: Aspectos de la historiografía de tradición náhuatl*. México, Instituto de Investigaciones Históricas, Universidad Nacional Autónoma de México, 2009.

<sup>16)</sup> José Rubén Romero Galván, *Los privilegios perdidos. Hernando Alvarado Tezozómoc, su tiempo, su nobleza y su Crónica mexicana*. México, Instituto de Investigaciones Históricas, Universidad Nacional Autónoma de México, 2003;

<sup>17)</sup> 2014 年に『コロニアル・ラテン・アメリカン・レビュー *Colonial Latin American Review*』誌（23 号）でアルバ・イシュトリルショチトルに関する特集が組まれたのに加え、下記の研究書が公刊されている。Jongsoo Lee and Galen Brokaw (eds.), *Texcoco: Prehispanic and Colonial Perspectives*. Boulder, University Press of Colorado, 2014; Amber Brian, *Alva Ixtlilxochitl's Native Archive and the Circulation of Knowledge in Colonial Mexico*. Nashville, Vanderbilt University Press, 2016.

<sup>18)</sup> 例えば、2020 年 10 月には『ストゥーディ・エ・マテリアリ・ディ・ストリア・デッレ・レリジオーニ *Studi e Material di Storia delle Religioni*』誌（86 巻 2 号）で「ヌエバ・エスパーニャのクロニカに見る先住民宗教のイマジネール」という特集が組まれ、バトコックとロメロ・ガルバンがチマルパインについて、井上がアルバ・イシュトリルショチトルについて論じた。

<sup>19)</sup> この点に関する意欲的かつ刺激的な研究成果として、以下の論文が挙げられる。

Gabriel Kenrick Kruell, “Resucitando la Crónica X. Reconstrucción filológica de un fragmento inicial de la *Crónica mexicáyotl* de Hernando de Alvarado Tezozómoc”, *Tlalocan*, vol. 19, 2013, pp. 301-461.

<sup>20)</sup> 『第 13 報告書』は、『テスココ王国史概要』に含まれる征服史の叙述で、1829 年にこの報告書部分のみが出版された。その後、1891～92 年にはアルフレド・チャベロによってアルバ・イシュトリルシヨチトルの残りの著作がまとめて公刊されている。

<sup>21)</sup> Hernando Alvarado Tezozómoc, *Crónica mexicana/Código Ramírez*. Ed. de Manuel Orozco y Berra, México, Porrúa, 3ª ed., 1980[1878].

<sup>22)</sup> バイティアは、プエブラ生まれの植民地エリートで著述家。18 世紀半ばから後半に『メキシコ古代史 *Historia antigua de México*』などを著した。

<sup>23)</sup> ボトゥリーニは、北イタリア出身で、18 世紀前半にヌエバ・エスパーニャに渡り、現地の先住民史料などを数多く収集した。『新たな北アメリカ全史の概念 *Idea de una Nueva Historia General de la América Septentrional*』（マドリッド、1746 年）を著した。

<sup>24)</sup> Hernando de Alvarado Tezozómoc, *Crónica mexicana*. Ed. de Gonzalo Díaz Mígoyo y Germán Vázquez Chamorro, Madrid, Historia 16, 1997.

<sup>25)</sup> 『クロニカ・メヒカーナ』の様々な写本の歴史的情報に関しては、以下の論文を参照。Clementina Battcock y Patricia Escandón, “La *Crónica mexicana* de Hernando Alvarado Tezozómoc. Sus manuscritos y estudios”, *Textos híbridos*, vol. 6, 2018, pp. 1-19.

<sup>26)</sup> 拙稿「植民地時代の先住民記録に見る先スペイン期の歴史像の形成」、『古代文化』第 69 巻第 1 号、2017 年、84～95 頁。

<sup>27)</sup> エギアラ・イ・エグレンは、メキシコ生まれの司祭。王立メキシコ大学で教鞭もとった人物で、18 世紀前半に『メキシコの書誌集成 *Bibliotheca mexicana*』を編んだ。

<sup>28)</sup> ガルシア・フィゲロアは、トルーカ出身のフランシスコ会士で、18 世紀末に副王レビジャヒヘドの依頼を受けてヌエバ・エスパーニャの歴史に関する文書の収集に携わった。

<sup>29)</sup> アンデスの先住民系の史料は他にも存在する。とはいえ、ティトゥクシ・ユパンキの記録は口述であるし、近年研究が進んでいる『ワロチリ文書』は修道士がケチュア語の語りを採録したものである。メソアメリカでは修道士が先住民の情報を収集したもの（例えば、ベルナルディーノ・デ・サアグンの『フィレンツェ文書』、「転記された絵文書」と呼ばれる『絵で見るメシーカ人の歴史』や『太陽の伝説』のような文書）を含めると、膨大な量の史料が存在することになる。

<sup>30)</sup> Fernando de Alva Ixtlilxóchitl, *Obras históricas*. Ed. de Edmundo O’Gorman, México, Instituto de Investigaciones Históricas, Universidad Nacional Autónoma de México, 2 tomos, 1985, tomo 1, pp. 47-85.

<sup>31)</sup> Fernando Alvarado Tezozómoc, *Crónica mexicáyotl*. México, Instituto de Investigaciones Históricas, Universidad Nacional Autónoma de México, 1992, p. 49. ナワトル語文からの筆者による和訳。

<sup>32)</sup> 『メキシコ征服』は、1552 年にサラゴサで最初に出版された『インディアス全史 *Historia general de las Indias*』の第二部を指す。

<sup>33)</sup> チマルパインの加筆を含むロベス・デ・ゴマラの写本については、以下を参照。Susan Schroeder, David Tavárez Bermúdez y Cristián Roa-de-la-Carrera (eds.), *Chimalpáhin y La Conquista de México. La crónica de Francisco López de Gómara comentada por el historiador nahua*. México, Instituto de Investigaciones Históricas, Universidad Nacional Autónoma de México, 2012. チマルパインによるエンリコ・マルティネスの書物の利用については、次の拙稿を参照されたい。Yukitaka Inoue, “Visión sobre la historia de un indígena del siglo XVII novohispano: las *Diferentes historias originales* de Chimalpáhin”,

*Cuadernos CANELA*, vol. XIII, 2002, pp. 43-54.

<sup>34)</sup> Alva Ixtlilxóchitl, *Obras históricas*, 1985, tomo I, p. 525.

<sup>35)</sup> その一例として、1519 年にコルテス一行がメキシコ湾岸のマヤ系先住民と戦闘を交えたセントラでの聖ヤコブ出現の話が挙げられる。

<sup>36)</sup> José Rubén Romero Galván, “Hernando Alvarado Tezozómoc”, en José Rubén Romero Galván (coord.), *Historiografía mexicana I: Historiografía novohispana de tradición indígena*, México: Instituto de Investigaciones Históricas, Universidad Nacional Autónoma de México, 2003, p. 314; Alvarado Tezozomoc, *Crónica mexicana*, 1997, pp. 36-37.

<sup>37)</sup> 例えば、チマルバインやアルバ・イシュトリルシヨチトルの生年は 1570 年代後半で、征服から半世紀以上後ということになる。

<sup>38)</sup> Domingo Chimalpáhin, *Diario*. Trad. de Rafael Tena, México, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes, 2001, pp. 76-77.

<sup>39)</sup> Robert H. Barlow, “La ‘Crónica X’: versiones coloniales de la historia de los mexica tenochca”, en Jesús Monjarás-Ruiz, Elena Limón y María de la Cruz Paillés H. (eds.), *Obras de Robert H. Barlow, vol. 3: Los mexicas y la triple alianza*, México: Instituto Nacional de Antropología e Historia, Universidad de las Américas, Puebla, 1990, pp. 13-32.

<sup>40)</sup> 拙稿『『クロニカ X』——研究史と問題点——』、『古代アメリカ』第 3 号、1998 年、67～82 頁。

<sup>41)</sup> ドウランの記録は広範な内容を扱っているが、ここでは第 1 部「歴史」がここでの議論に該当する。